

「夏目漱石と寺田寅彦 ー熊本時代を中心にしてー」

四宮義正

はじめに

寺田寅彦の生涯にわたる師が夏目漱石であることはよく知られている。その最初の出会いは熊本の旧制第五高等学校である。寅彦にとって、もう一人の師となる田丸卓郎にもここで出会っている。

二人とも最初は授業の先生であり、やがて個人的に交流し、それぞれの師弟関係は東京に持ち越され、両師が亡くなるまで続くことになる。すべては寅彦の青春の地、熊本で始まっているのである。

昨年10月に熊本のゆかりの地を訪ねたので、写真を中心にして三人の交遊を紹介する。

1. 熊本時代を中心とした三人の年譜

西暦	和暦	月、日	寺田寅彦	夏目漱石	田丸卓郎
1867	慶応3	2月9日		江戸で生れる。(11歳年長)	
1872	明治5	9月29日			盛岡で生れる。(6歳年長)
1878	明治11	11月28日	東京市で生まれる。		
1896	明治29	4月		第五高等学校着任。	
		8月			第五高等学校着任。
		9月	第五高等学校入学。		
1898	明治31	5月	田丸卓郎宅を訪ねる。		
		6月末頃?	夏目金之助を訪ねる。		
1899	明治32	7月	第五高等学校を卒業。		離任、京都帝国大学へ赴任。
		9月	東京帝国大学入学。		
1900	明治33	7月		英国留学のため熊本を出発。	
		9月			東京帝国大学に赴任。
1903	明治36	4月		東京帝国大学講師。	
1907	明治40	4月		朝日新聞社入社。	
1916	大正5	12月9日		死去(49歳)	
1932	昭和7	9月22日			死去(60歳)
1935	昭和10	12月31日	死去(57歳)		

この年譜で分るように明治29年に漱石着任、田丸着任、寅彦入学が続いている。学生の寅彦は3年で卒業するが、同時に田丸も転勤しているし、漱石も一年後には熊本を離れている。来熊順序、滞熊年の重なりは奇跡的である。また、年齢をみると、漱石が11歳、田丸が6歳の年長であり、最初は師として、やがて同僚あるいは友人になれる絶妙な年齢差である。

寅彦は卒業後に東京帝国大学に入るが、両師もそれぞれ東京に移り熊本の師弟関係が東京で友人関係に発展していくことになる。

2. 両師の追憶

寅彦に「夏目漱石先生の追憶」と「田丸先生の追憶」という作品がある。どちらも昭和7年12月に発表されている。それぞれ五高時代の部分を引用してみる。

## 夏目漱石先生の追憶

熊本第五高等学校在学中第二学年の学年試験の終わった頃の事である。同県学生のうちで試験を「しくじったらしい」二、三人のためにそれぞれの受持の先生方の私宅を歴訪していわゆる「点を貰う」ための運動委員が選ばれた時に、自分も幸か不幸かその一員にされてしまった。その時に夏目先生の英語をしくじったというのが自分の親類つづきの男で、それが家が貧しくて人から学資の支給を受けていたので、もしや落第するとそれきりその支給を断たれる恐れがあったのである。

初めて尋ねた先生の家は白川の河畔で、藤崎神社の近くの閑静な町であった。「点を貰いに」来る生徒には断然玄關払いを食わせる先生もあったが、夏目先生は平気で快く会ってくれた。そうして委細の泣言の陳述を黙って聴いてくれたが、もちろん点をくれるともくれないとも云われるはずはなかった。(略)

## 田丸先生の追憶

(略)第二学年の学年試験の終わったあとで、その時代にはほとんど常習となっていたように、試験をしくじった同郷同窓のために、先生がたの私宅へ押しかけて「点を貰う」ための運動委員が選ばれた時、自分もその一員にされてしまった。そうしてそのためにもう一人の委員と連立って始めて田丸先生の下宿を尋ねた。当時先生の宿は西子飼橋という橋の近くで、前記の化学のK先生と同宿しておられた。厳格な先生のところへ、そういう不届き千万な要求を持込むのだから心細い。叱られる覚悟をきめて勇気をふるって出かけて行ったが、先生は存外にこうしたわれわれの勝手な申分をとにかくも聞き取られた。しかしもちろんそんなことを問題にはされるはずがなかった。その要件の話がすんだあとで、いろいろ雑談をしているうちに、どういっかけであったか、先生が次の間からヴァイオリンを持ち出して来られた。まずその物理的機構について説明された後に、デモンストレーションのために「君が代」を一遍弾いて聞かされた。田舎者の自分は、その時生まれて始めてヴァイオリンという楽器を実見し、始めて、その特殊な音色を聞いたのであった。(略)

寅彦は生涯にわたって日記を書いているので五高時代の日記を調べてみた。明治30年は日記が残っていないが31年は全集に収載されている。

漱石の名を探すと、10月2日に「漱石師の許にて運坐の催あり」とある。運坐とは句会のことである。この時は寅彦第三学年であり、漱石と俳句に熱中していた頃である。しかし、これ以外に見当たらないのは不思議な気がする。俳句帖のやりとりがあったので日記に書かなかったのかもしれない。初めての訪問日、訪問理由も「追憶」を信じるしかない。今では英語の試験をしくじった男は親友の竹崎音吉とされている。

一方の田丸はしばしば日記に出てくる。第二学年の明治31年2月4日にはクラス親睦会に田丸教授が出席して太陽斑点やコロナについて談話したことが書かれている。5月2日には田丸を訪れて

理科を修めるように勧められて父に許可を得る決心をしている。9 日の夜にも訪問してヴァイオリンの演奏を聞いている。6 月 19 日には「田丸先生を訪ひ野並の試験延期の事を願ひ其れより野並に行く」と書かれている。この野並とは同じく高知から五高に入学した野並亀治のことであり、前後の日記から病気で入院して試験が受けられなかったのが交渉に赴いたことが分る。「追憶」に書かれている訪問理由とは微妙に違っているしヴァイオリンを聞いたのはこの時ではなさそうである。

「追憶」は昭和 7 年に明治 31 年を思い出して書いているので 34 年前のことであり、記憶力が格段に優れている寅彦といえども思い違いがあるようである。

ふたつの「追憶」の書かれた順序は分らないが、田丸が亡くなって理学部会誌の編集委員から要請されたことにより「田丸先生の追憶」を書き、漱石の亡くなった時は自身の病気で書けなかった「夏目漱石先生の追憶」を続けて書いたような気がする。また漱石の追憶を書くためには時間経過が必要だったとも言える。そのためある部分は記憶が混合されて二つの追憶が書かれたように思われる。

### 3. 熊本での関連場所

熊本大学の五高記念館、下宿先である立田山麓の柏木家、夏目漱石の五番目の家である内坪井夏目漱石旧居記念館を訪れたので、その様子を写真で紹介する。(写真省略)

### 4. まとめ

寺田寅彦日記に漱石と田丸が出て来る日数を数えてみたところ、漱石が 223 日(ただし漱石の生前は 150 日)田丸は 247 日であった。実際に読んでみると迷う項目も多いが、本人だけでなく夫人のことや関連事項が書かれている日も含めて広めに拾った結果である。漱石が 16 年早く亡くなっているのである意味当然かもしれないが、田丸の多さは私にとって意外であった。

漱石とは理系の話もしているが、やはり俳句や小説の文学、書画の美術を中心とした交流であり絵画展などもたびたび一緒にでかけている。

田丸は工科(造船)から理科(物理)への転向の後押しをしてもらっているし、東京帝国大学で同僚になり学校で顔を合わす機会が多かった。また小石川区原町や本郷区曙町で住んでいた寅彦と田丸は家が近く、ヴァイオリンを携えて訪問して合奏することもあったし、田丸が熱心に取り組んでいた「ローマ字」にも協力している。また家の新築でも随分世話になっている。

妻を二度まで亡くし、胃潰瘍で休職するなど人生の辛い時期が多かった寅彦にとって漱石と田丸は会うことで慰められ、元気を与えてくれる大切な人だったのである。

(附記)榎 70 号に俳句を仲立ちとした熊本時代の寅彦と漱石との関係を書きましたので重なる部分は省きました。その分、講演では触れることの少なかった田丸卓郎関係を増やしました。また榎 59 号(平成 21 年 9 月)に山田功様が「寺田寅彦ゆかりの地を訪ねて一熊本一」を書かれていますので是非参照してください。